

花巻にて ― 「虔十公園林」探し

昭和六十年の頃、オフィス・コンピュータがオフィス・プロセッサと呼ばれるようになった。それは、単なる事務のオートメーション化を目指していたコンピュータのシステムが蓄積されたデータを分析して見えるものの重大さに気づいたからだ。

その頃、水戸市の冷凍食品販売会社からデータベースを使う販売管理システムの開発を依頼された。まだハードの能力が追いつかなかった事もあり、その開発に失敗し大赤字を出した。その傷が癒えぬ間に、関が原のカーペット工場のシステム開発でもイージミスにより赤字を出し、開発業務の厳しさを骨身に知らされた私は社内の反対を押し切って、電気メーカーが開発したプログラムの部品化システムを導入した。

財務・給与・販売のソフトをソースコードごとで購入し、部品を修正してシステムを進化させながら納入する。この方法だとシステムのテンプレートがあるので設計や製造の工数が大幅に削減された。そしてなによりも要件定義が実物を見ながら出来るので分かり易く開発で大きな失敗が生じない。この方式により、それまでのシステム開発導入費の半値以下にしても十分採算がとれるようになった。

仙台のゴルフ場や電気部品メーカー、気仙沼のホテルや漁業会社、陸前高田の酒造会社などにこの方式のシステムを導入し、釜石、宮古、盛岡、横手、山形と東北地方を中心として短期間にユーザーが拡がりソフト会社としての提案力も付いた。

そんな時に、岩手県花巻の清掃会社から出来高給の計算システムの仕事を依頼され、前日に仕事をしていた陸前高田から花巻に向った。花巻市に近づくると宮沢賢治記念館の看板が目に入った。時間があれば見学して見ようと思いつきながら通りすぎ、しばらく走ると道端に白い木碑があり「新渡戸稲造生誕の地」と書いてあった。私はその瞬間、あのアメリカ帰りの偉い先生とは新渡戸稲造ではないだろうか、それなら花巻の街にはあの「虔十公園林」が実在していたのではないかと思った。

娘が小学生になった頃、宮沢賢治の童話集を買って「虔十公園林」の話に出会った。どこかたりない感じ人の虔十は荒地に杉の苗を植え大事に育てた。そこは子供たちの格好の遊び場になっていた。杉林をつくり守る虔十の姿こそが、「欲もなく、誉められようともせず、でくのぼうと呼ばれても」と詠う賢治の理想の生き方なのだろう。

そこを遊び場にしていた子供のなかに、アメリカ帰り偉い先生はいた。その先生が故郷の公民館で講演会を開き、立派になった杉林を見て「仏の十全とは」と絶句したと言う。それを見た町の人々も、そのすばらしさに気づき「虔十公園林」と名づけて大切にしたという話である。

外部からの眼とか評価する力が加わって、はじめて本物が見えてくることがある。それを気づかせてくれた偉い先生が新渡戸稲造だったのか。どこにもありそうな話、「虔十公園林」は人に、やさしく深く見る眼を持ちたいと思わせる名作です。

駅前のビジネスホテルに宿をとり、主人に「青年会議所の活動をしている人を紹介してくれ」と頼んだ。するとお隣の時計屋さんが元理事長だったと紹介してくれた。私が時計屋さんに名刺を出すと「公文君の弟さんですか」と聞かれた。同じ商店街に二歳上で同姓の時計屋がいる、聞けば東京で一緒に修業した仲間だったとのこと。その若主人が青年会議所のメンバーが集まっている店に連絡してくれた。

早速、迎えが来てリーゼント頭の若いプログラマーと虎さん似の中年男の二人組は十人程の花巻青年会議所のメンバーが集まっている「どじょう屋」に入った。

「ビードロ公園のことかな」、「新渡戸稲造が講演会を開いたという記録はあるよ」とどうやら童話の公園はないらしい。「スウェーデンから偉い先生が賢治さんの事を調べに來たりするが、地元の人は色々なことを知ってるんで」となんとなく否定的な話し振り、賢治と妹のこと、宮沢財閥と言われている人などの事らしい。

翌日、宮沢賢治記念館を訪ねると、そこに「もろともに、輝く宇宙の微塵となりて、四方の空へ散らばろう」と語りかける賢治の大きな眼があった。

平成十六年八月記

花巻での話しの続き

「縁」に気づく事はまれで、メロドラマのようにすれ違ってしまうのが人生なのかも知れない。それは、大量の顧客データの中に金鉱脈になる重要な情報が埋もれていることを知らずに捨てていた会社があるキーワードを見つけ情報を串刺しにした時、大量のデータが見事なまでに金鉱脈のありかを示している事に気づくのと一緒に、特別な見方やメソッドが必要なのかも知れない。

平成十九年十月二十五日、翌日に花巻のゴルフ場で行われる協力会コンペに行く準備をしようと宿泊サイトを開いた。今回は一昔前に泊ったことがある駅前のビジネスホテルに宿泊し、近くにあった和食の店でおいしかった天ぷらでも食べながら、店の主人と昔ばなしをしたかと思ひ、名前を忘れた駅前のホテルを探した。

一年前に亡くなった父が残したノートに生前はあまり話さなかった海軍時代のことを書いてあった。その中に、父が海軍兵学校へ入学した当時の校長であった岩手県出身の及川古志郎のことが書いてあった。及川校長は漢学の大家でよく図書館で大蔵経の大巻を読んでいたそうである。父は「なぜ陛下に忠節を尽さねばならないのか」と悩み、及川校長に直接悩みを打ち明けると「そうした苦しみは決して妥協してはいけない考え抜きなさい」と指導してもらったと書いてあった。

そこで、気になっていたのが以前仕事をさせてもらった清掃会社の社長の事だった。

「及川ヨシロウです」と電話で話す立派な態度を思い出していた。名前も似ているし及川社長に聞けば及川校長の事がなにか分かるかも知れないと思っていた。

ホームページを開いてみるとお孫さんが社長をしているらしく、会社の規模も五倍ぐらいに大きくなって三百人近い規模になっている。業種も以前のビルメンテから介護事業へと広がっているようである。そのホームページに「及川由郎会長追悼特集」のボタンが付いていた。昨年十二月十七日、父と同じ日に葬儀が行われていたらしい。そんな年配だったのかと驚いたが、いまさらながら歳月の過ぎる早さを思った。

そして、まだ午前中だし、いまから行けばお墓参りが出来ると思い、なつかしさも手伝って花巻の清掃会社に電話をしてしまっていた。

「先ほど、会長がお亡くなりになっている事をホームページで知り、お墓参りをしたいので地図をファックスしてもらいたのですが」と告げるとしばらくして「家族のものですが」と若い女性の声が出た。以前に仕事でお世話になっていた事情を告げると「東京方面からいらっしゃるなら花巻南インターの近くですので自宅へ来て下さい」と住所と電話番号を教えられた。明るいうちに着くには急がなくてはと家内に連絡し、残った仕事を済ませて急遽出発した。

少し暗くなりかけた頃に花巻市小瀬川の及川さん宅に到着した。古くからの農家風の家は最近リフォームしたらしく内部はモダンな設計で玄関の大きな開き戸と大理石の床、照明器具の垢抜けたところは西麻布のレストランに入ったような雰囲気だった。そして、出てきたお嫁さんも都会にいるようなすらっとした美人だった。

家内も一緒にお参りをさせてもらい、及川由郎さんの奥様のやさしそうなお婆さんに「実は、元海軍大臣をなさった及川古志郎さんの事をおじいさまにお聞きしたかったのですが」と尋ねると、「先祖様なんですよ」と言われた。「直系はガンダイ(岩手大学)の医学部にいます。いまでも毎年集まります」と言っていた。「もともとは東和町の方なんですが」とも言っていた。その夜は、父の恩人である及川校長のご仏前にお参り出来たことに感謝して家内とよかったよかったと花巻温泉の湯につかった。

翌日、私がゴルフコンペに参加している時間に家内は宮沢賢治記念館や新渡戸稲造記念館を見してきた。そして、その話を聞きながら帰途に着いた。新渡戸家が岩手県に及ぼした影響の大きかった事を二人で勝手に決め込んで話し合っていた。

昭和の非常時に米内海相、板垣陸相、及川海相、東條陸相と国の重要人物を岩手県が輩出していたのは異常なことであった。また、文学の宮沢賢治、石川啄木そして近代美術の先駆者である萬鉄五郎や高村光太郎など芸術家を生み、その精神世界に大きな影響を与えていたのが新渡戸家ではなかったかと思った。

その原点が新渡戸稲造の「武士道」ではなかったかと話しあった。「武士道」は茨城の五浦海岸に住んだこともある岡倉天心の「茶の本」と共に、明治時代に西欧に日本の精神文化を紹介した重要な書籍である。封建社会が崩れ行く日本の社会にあつて、長きにわたつて熟成された日本文化の粹とも言うべき武士道精神は、わずかに日本の軍隊の中に「大和魂」として残されるのみとなつていた。「武士道」や「茶の本」はおしよせる西欧化の嵐の中で「和魂洋才」のうねりを起こし、日本の伝統文化を守つた日本人にとつては大切なものであつた。父は岩手県出身の及川校長と出会うことによつて本物の武士道を目の当りにし教えを受けることが出来たのだろう。

私は、軍が徴兵しないで戦後の復興に備えていたと言われる理工系の学生を集めた浜名海兵団が存在したのは、及川古志郎の考えではなかったかと思つた。

昭和十九年に静岡県浜名湖の海側、新居の関所近くに作られた海軍技術士官養成の名目で集められた生徒達は戦後、電気・機械・自動車などの分野で活躍し、日本を奇跡の復興をさせる人材となつていった。奇しくも、浜名で教官をすることになつた父は「犬死はするな」そして「真の忠義は日本を再建する事にある」と及川校長からの武士道精神を生徒たちに伝えたのではないだろうか。

武士道が究極に目指したものは刀を抜くことではない。刀を抜かずに「平和」を守る事であると新渡戸稲造は書いている。

平成十九年十一月記

「心に残る とつておきの話」について

戦争が多くの人生を翻弄しました。戦争に反対して命を奪われた人もおりました。侵略され、肉親を殺された中国や東南アジアの人々の憤りは消えるはずがありません。どうして、互いに見知らぬ若者同士が遠い小さな島をめぐる争い、何万人もが死ぬことになつてしまつたのか。フィリピンのレイテ島で飢えや病と戦つて捕虜になつた作家の大岡昇平は「財閥と陸軍が結託して戦争をはじめた」と書いている。

元軍人であつた父は戦争についての話をしなかつた。戦後、復員して生きるためにはじめた小さな事業、「塩焼き」から「飴づくり」「パンづくり」と欠乏の時代を切り開いたその事業での失敗談などは何時も面白おかしく話していた。創意工夫による競争社会がいかに人間性を向上させるおもしろい仕組みであるかを実感していたようだ。それに反して軍隊などの官僚社会については「面白くないぞ」と言つていた。

その父が仕事をはなれて十年ぐらいして、「浜名の学生が自分のことを本に書いていてくれた」と言つて一冊の本を持ってきた。「その学生（と言つても七十才）が会いに来ることになつたので連れてくる。」と言つた。その「心に残る とつておきの話」とタイトルの付いた本は何人かが投稿したものをまとめて掲載したもので、その中に、

横浜市の武井富士弘さんが書いた「わが人生の原点」と言う文章があり、父の思いで綴ったものであるとの事だった。それは次のものだった。

わが人生の原点

武井 富士弘

私は戦中派である。今年(平成五年)は学徒出陣五十周年に当たるが、あの昭和十八年の時、私は理科系の専門学校在学中で病床にあり、次の年の十月に海軍の委託生から技術士官の卵として浜名海兵団に入隊した。江田島の兵学校並の訓練にも我々はあの腰の短剣に憧れ、さらに祖国存亡の時に軍人になるという感激で毎日の猛訓練に精進していた。そんなある日、昭和十九年の秋、大学専門学校出の技術士官の卵が一同に会した座学の後、兵学校出身の海軍大尉から「この際何か質問があるか」と聞かれた時、大学卒の一学生がこんな質問をした。「私はこの戦争は日本が負けると思いますが。その時、我々技術士官の心構えについて教えて下さい。」というものであった。私は「これはえらいことを聞いたものだ。どんなことになるだろうか。もしかするとこの学生は教官から一発喰らうかも」と思った。私自身大正十二年生まれ、小学校の時から戦争の中に育てられ、いっばしの軍国少年になっていた。病床でもあの九軍神の話が書かれた「海軍」を愛読していたものである。

その教官はしばらく沈黙の後、静かに口を開いた。そして、「今の質問は非情に大事な質問である。正直いって私もこの戦いは負けると思う。その時には我々兵科士官はほとんど戦死すると思う。貴様等技術士官は、ぜひ生き残って日本再建に尽してもらいたい。」と結ばれた。学生のいた講堂はしばらくシーンと静まり返っていた。

あれから五十年が経ち、様々なことがあったが、ことあるごとにこのことが思い出され、まさに私の人生の原点であると思っている。

同じ教官からまた同じような場所で課題が出された。なんと次のような課題であった。「貴官が帝国海軍の潜水艦の艦長として指揮をとり太平洋を進んでいた。突然、前方より米国の艦隊が船隊を組んで進んできた。貴官は艦長としてどんな行動をとるか」というものであった。我々はこれが正解。と、「玉砕を期して敵陣に突入する。」と皆が書いた。数日後の講評の折、再びその教官はこう言われた。「先日あの課題に際して、貴様等の中に「逃げて帰る」という回答が一つも無かった。残念である。日本は皆が思っている以上に大変な段階である。」と云われたのである。あの時受けた衝撃と五十年経った現在とは若干違うが、何よりも私が強調したいのはあの戦局の中で一下級士官(大尉といっても軍隊の中では下級士官である。年令も二十四、五であったろう)が日本の国全体をこので真剣に正直にかつ勇氣を持って話された、その態度であり、高く評価せずにはおれない。

明けて昭和二十年二月、呉海軍工廠に配属され、三ヶ月の技術研修を受けた。工場見学の中で特殊潜航艇(二人乗りのもの。回天といっていた)の前で案内の兵科少佐に次のように言われた。「貴様等、技術士官は命が惜しいから技術士官になったろうが、この回天の中に入れるか。入ったら最後、外からマンホールを閉められるのだから自分では出られない。この潜航艇に乗って敵陣へ進む人々の気持ちが分かるか。」と我々を見回された。私はその時「命が惜しいから・・・」と言われた技術士官への侮辱に対する悔しさよりも、自分自身が果たしてこの「鉄の棺桶」の中に入れるかという命題の方に強いショックを受けた。その時の背骨に電流が走るような衝撃を今も覚えている。

その後、数年前に浜名の同期の人々と江田島の旧海軍兵学校を参観し、その参考館の前に人間魚雷が置かれているのを見た。案内の自衛官の説明によると捕虜一号になられた酒巻少尉がここに来られ、人間魚雷の中に入れて出てこられた時の感想を聞いたが「何も言われなかった」ということであつた。「何もいわれなかった」という事は「言いたいのことは沢山あり過ぎて何もいえない」と言う事なのか、ただ「何もいえない」と言うことか・・・それは経験した酒巻さんしか分からないことであろう。あの参考館の壁一面に書かれた実に多くの江田島出身戦死者の名前を見た時、その余りの多さに驚いたことを覚えている。

今、平成五年の現在、国際貢献、PKO の論議などの盛んな折に一体世界の平和とは何か、日本の立場はどうか、一人一人のわれわれはどう行動するかという時に私はいつもあの浜名や呉や江田島の光景を思い出し、自問自答するのである。

(以上が掲載された文)

後日談

平成六年十二月十五日に私は浜名の主任部教官西野大尉と再会した。前段の「わが人生の原点」を書いた時点ではかの大尉が西野大尉であると確認できなかったのだが、関連文が縁あつて「水交」に掲載されたことで同じ茨城県に在住の鈴木通夫氏(海軍機関学校七十四期)からの電話で、間違いなく西野大尉であるという事がわかり、その後鈴木氏が西野氏に会い「確かにそういう話を浜名でした。良く憶えていてくれた」と話をし、三時間も話に花が咲いたとの事だった。連絡を受けた私は西野大尉と直接連絡をとり、この文を発表させ戴いた事の事後承認を得た後、面会できるのを楽しみに待った。

当日十五時に水戸市のホテルで面会したが、当時のことが次々に思い出され、三人で七時間もの時間を過ごし、こんなにも楽しい一日はなかった。

あの第一話の中にある「貴様等技術士官は是非生き残って日本の再建に尽してくれ」と言われた、あの件を繰り返して語って下さった。また、第二話の「逃げて帰れ」と訓えられたのも、前途ある若者達をむざむざと死なすことはもつたないといふ心から思っ

ておられたのが良く分かった。当時西野大尉は胸を患っておられ、軍医からは決して駆け足をしないようにと厳重に注意されており、それが後期まで続いていたということとを伺い、私は異常な感動を禁じえなかった。また、最高学府を出た二千人の若者を短期間に如何にして海軍士官に仕上げるかと大変緊張していたとも話された。

西野大尉が特に重点をおかれていたことは「統率学」であったそうで、その真髓を一番に理解した見習尉官は、あのソニー創設者盛田昭夫氏で、ご本人が戦後「浜名での西野教官の統率学の教えがどんなにか会社の経営やその後の国際舞台での私の人生に大きく影響したか計り知れない」と語っておられるとのことである。正に教育者冥利に尽きるというべきであろう。

同席して下さった鈴木氏も同じ海軍三校会(兵学校・機関学校・経理学校)の茨城会で知り合った関係で、その信頼し合っておられる間柄を拝見していて、共に戦後の長い間茨城県の政治・経済・教育の各方面で活躍されたことを伺い、なるほどと納得した。鈴木氏は終戦後、引き揚げ業務に従事される傍ら上野の浮浪児の更正など、福祉・教育方面に活躍され、現在教育界で注目を浴びている私立水城高校を三十年前に企画創設された功労者だと伺った。その鈴木氏が我々と同じ二十年三月に舞鶴の機関学校を卒業した時、皆当然の様に特攻隊を志願したのを見ていた分隊監事が寂しい顔をしていたのが、今更ながら思い出だされると言われた。また、分隊監事の卒業に当たったの餞別の言葉は「浜までは、海女も養着る 時雨かな」(死期に向っても最後まで自重するよう)」の言葉であった。

西野氏の話で特に印象に残った話は次の三話である。一話は、昭和十四年に上海で中国の青年に言われた言葉であった。「日本の青年はあまりに世界を知らない」任官間もない頃のことである。二話は、終戦後、進駐軍の中佐と会見した時、彼曰く「今度の戦いは勝った方も負けた方も共に傷ついた。戦友よ」と握手された。三話は、兵学校在学中のことで、西野氏が様々のことに疑問を持ち図書館に通われた頃、当時の及川古志郎校長も良く図書館に來られたので、直接悩みをぶつけたことがあったが抑えつけずに良く聞いてくれたそうである。

このような西野氏の体験談を聞き、人生は常に問題意識をもつべきだと感じている。